

【社会科学】

【工学】

研究論文

天草におけるコレジヨ関連施設の形成について

村田 明久*¹

The Formation of the College Related Facilities in Amakusa

MURATA Akihisa

Summary

“The Society of Jesus Japanese Report Collection” has been analyzed from early times. I'll report on 16th and 17th century Christianity from the angle of the area science-colony forming viewpoint. The existence of Amakusa College was confirmed from that book, but there is no established theory. It was proven that Kawachiura, in a narrow sense, is the location of Amakusa by the effort of historians in 1990. But the exact location remains unknown. I present a hypothesis about the location and the constitution of Christian facilities in Kawachiura.

Keywords : (formation, christian village, Kawachiura, Amakusa)

1. はじめに

『イエズス会日本報告集』は早くから分析されている。ここでは、十六・十七世紀のキリシタンについて地域における集落形成の視点から報告する。

同書から、天草学林(コレジヨ)の存在は知られていたものの、「天草」がどこなのか定説がなかった。1990 年末、歴史家らの努力により^①、天草とは狭義には「河内浦」を指したことが証明されたが、その河内浦のどこにあるのか、それ以上はよくわかっていない。そうした河内浦のキリシタン施設の所在と構成について、仮説の提示を試みた。現在は、一町田川の分岐したところ(現河浦支所庁舎・旧河浦中学校の川土手)に天草コレジヨ跡が整備されている。

2. 当初の教会地

2-1 港とキリシタン

1563 年 11 月 17 日付、アルメイダ修道士書簡に、天草領主(天草鎮尚)とアルメイダ修道士との交渉が記されている。アルメイダは領主に次の 5 つの事を願い、領主はこのすべてを承諾し、執政官、家臣などに洗礼を授けた。

- 「第一は、領内にデウスの教えを弘めることを満足とする各城主の署名した文書であり、
- 第二は、彼がその家臣らの信奉すべき教えを知るため八日間説教を聴くこと。
- 第三は、もしデウスの教えを好ましく思うならば、キリシタンらが自分たちの頭として仰ぐため、彼の息子の一人をキリシタンにすること。
- 第四は、彼の所領に教会を建てるため、その用地を与えること。

*¹ 大学院 非常勤講師

第五は、同地より志岐までの七里の海岸にキリシタンになることを許すお触れを出すことであった」⁽²⁾

『フロイス日本史』九巻では、布教に次いで、アルメイダから天草の貿易港の打診が行なわれた。天草氏は河内浦から約5km東の崎津の港を案内していた。

「そこで彼（注：アルメイダ）は、インドから（来る）船を迎え入れることができるかどうかを調べるために、どのような港があるか見せてもらおう、と言った。人々はさっそく彼に一寒村で崎津という港を見せ、同時にその港の上の山も見せた。殿が言ったように、そこは、商品や船舶や商人の安全をはかるため、一城を築き得るところであった」⁽³⁾

上記のアルメイダの行動から、布教活動と貿易とは一連の交渉により、地域形成されたことがわかる。

そしてアルメイダが天草を訪れた時の宿泊地について、

「彼の邸の側にある一寺院に私を泊ませた」⁽⁴⁾

とあることから、「彼の邸」すなわち城館と寺院は近接していたであろう。そうなると当時の天草氏の居城がどこか問題になる。

河内浦には、現在、一町田川の右岸にある河内浦城と、左岸にある下田城の二つが知られている。元禄十五年（1702）の『肥後国絵図』⁽⁵⁾に川左岸にのみ城が描かれていること、字名で「城山」という地名が下田城の側に残ることから考えて、当時の天草氏の居城は下田城と推測される。従って、「彼の邸の側にある一寺院」とは信福寺のことであったと考えられる。

2-2 教会の位置について

河内浦の司祭館はどこにあったのか。現在は大きく二説あり、一つは現河浦支所庁舎（旧河浦中学校）の川土手、一つは下田古城説（鶴田文史）が上げられる。

1579年12月10日付、カリオン師書簡によれば、天草領内にすでにキリシタン集落が形成され、レジデンシアが設けられていた。下記文中の「要衝天草」とは河内浦のことである。

「（天草氏の）領内に司祭館が二カ所あり、その第一は同地の要衝天草にあって、通常司祭二名と修道士一名が駐在する。いま一つの司祭館は同地

の他の主城、本渡にあって司祭一名と修道士一名が駐在している。これら二つの司祭館が同地の教会と町村を管轄するが、教会は小さいながらも数が多い」⁽⁶⁾

1582年2月15日付、コエリユ師の一五八一年度日本年報には、司祭館が縮小したこと、さらに巡察視ヴァリニャーノが修院について報告している。

「その内、重立った者は天草の領主であり、彼の所領においては多数の町村におよそ一万五千人のキリシタンがいる。当地方にはかつて三つの司祭館があったが、今ではただ一カ所に減り、司祭二名および修道士二名が駐在し」⁽⁷⁾

「当初この地には三修院があったが、私が出発する時に一つに減じた。ここにも我らは非常に良い場所を有している。ただし修院は、寝室三つを伴った一室のみで狭小である」⁽⁸⁾

今村義孝は『天草学林とその時代』で、1582年2月の『日本のカーサおよび各々が必要とする経費のカタログ』から、河内浦のカーサ（修院）が天草のキリシタン全部を掌握したことになる。カーサとはレジデンシアを統合し、キリシタンを教化するに足るだけのパードレとイルマンが共に居住し、そこから随時諸所を訪問巡回する場所というから、規模がレジデンシアより大きいとしている⁽⁹⁾。このことで河内浦の一司祭館（レジデンシア）は、天草島の修院（カーサ）に格上げされて組織は大きくなったものの、建物位置までは変更なかったようである。

1582年10月31日付、ルイス・フロイス書簡に、天草氏が亡くなった時の状況が記されている。

「彼（注：ドン・ジョアンニ）の父（注：ドン・ミゲル）の靈魂のため、現在、大きな教会を建設していることであり、そのため彼が主として木材の援助を行っているほかにキリシタンたちが寄進している。また、山の麓を人手によって切り開き、我らの修道院内に地所を設け、大きな十字架を掲げて同所に彼の父を丁重に葬らせた」⁽¹⁰⁾

墓地と大きな教会を建設するのに、山麓を切り開き、我らの修道院を拡張したという。寺院の場所を想定すると、現在は崇圓寺、信福寺、安養寺の三つある。このうち、安養寺は平坦地にあるので上記に該当しない。また崇圓

寺は高い石積みで、山麓を切り開いたような地形はないようである。それに対し、信福寺の山麓地形にはそれらしき地形が見られる。このことから、信福寺辺りが「我らの修道院」、その山麓の切開地に「教会」があったと推定される。

3. 天草学林の移転

3-1 天草島選定の理由

1587年(天正十五)秀吉が公布した伴天連追放令のため、次のような迫害への対処法が述べられていた。

「これらの殿たちは、(イエズス会の)上長らに、さっそく学院と修練院を撤去して、それらを天草に移させるようにと強く要請するところがあった」⁽¹¹⁾

「この土地がコレジョヨに選ばれたのは、この迫害の時期に存置するに一番都合で避難できるからである」⁽¹²⁾

だがどうして、天草の河内浦の地が隠匿地に選ばれたのであろうか。

これは天草島が、日本の中央から離れた辺境の離島で知られないということ以外に、河内浦の位置する天然地形に理由があると考えられる。第一に、河内浦の位置する羊角湾は中国・東南アジアの東シナ海側に開き、西欧人から見て避難しやすいことである。第二に、羊角湾の名の如く、入江は山ひだが交互に重なり、湾奥は下田城の裏山が屏風のように立ち河内浦集落を隠していた。背後の山を遠見台と称し、いつも番兵が立っていたなどの伝承がある。このように戦国時代において、いち早く危険を察知し、外国船が海外に避難できる陣形として、天草、中でも羊角湾奥の河内浦が一番であったろう。天草氏の居城を下田城と推定すると、外国船が拠点とする町の陣形にかなうことになり、もう一つの候補地の河内浦城より防御の体勢が優れ、立地の可能性が高いと感ぜられる。

3-2 移転後の建物構成

大村の修練院、有馬の学院・修練院・神学校について、天草への移転が検討された。最終的に、大村では日本語学校を残し、有馬では神学校を八良尾に移転し、天草には学院(コレジョヨ)と修練院(ノビシヤド)を移転する

ことが決定された。

『フロイス日本史』十二巻に、移転工事の概要が述べられている。

「(学院、修練院、神学校と云う)三つの大きい家屋には、それぞれに(イエズス)会員、同宿、下僕を含めて百人を超えるほどの人員がおり、それらを移動させるのはきわめて難しいことで、大至急に工事を進捗させるために、司祭の側ばかりでなく、殿たちの側でもすこぶる入念な努力がなされた。・・・有馬殿は必要な人員をすべて提供したので、毎日、二百、三百、時には千人もの者が同時に働いた。・・・なぜなら当時は、彼は二つの城で絶え間なく工事を続行中であり、・・・天草においても同様な工事が進められていた。ここでは、ドン・ジョアンが(先に)提供してくれた数軒の家屋と、二十人以上の同宿、および四十人近い下僕を収容するに足りる一学院が設立された。これらの下僕全員のためには、(数軒の)家屋と仕事場が作られた。・・・かくれ神学校が八良尾に移転した少し後に、学院と修練院も天草に移された」⁽¹³⁾

これらの記述から以下の事に気付く。一つは、学院は多人数が収容でき、建物規模が大きかったことである。学院は、イエズス会員六十名のほかに、六十名の同宿と下僕を同時に収容できるもの。下僕全員のため(数軒の)家屋と仕事場。これらが学院の構成建物であった。あと一つは、建物の種類として、学院、修練院、(数軒の)家屋と仕事場、さらに印刷所、教会で構成されていたことである。

学院の建物規模は、人数が120名として、延べ面積で一人当たり10㎡とすると1200㎡。修練院は人数が24名とあるので、同様に240㎡。合計すると1440㎡(約1500㎡)。同じ面積の外部空間があるとして約3000㎡(約900坪)の広い土地が必要になる計算となる。

1592年(文禄二)、河内浦の避難地にはさらに厳しい制約が加わる。

「関白が名護屋に下ったことから、数々のキリシタンの殿たちが(司祭たちに対して)大勢(のイ

エズス会員)が関白の命令に反して(一カ所に)集合していることは許されないことと思われるから、ともかく学院を解体するようにと強く要請していたことである」⁽¹⁴⁾

集合して大きくなった学院が許されなくなった事態に、次のように対処した。後半の「この教会と(修道院の)建物をどうするか」の記述は、修院の場の状況を記述したと考えられる。

「(イエズス会としては)ついに、学院を天草の地から撤去しはしないが三つの部分に分けることを決定した。・・・その地の奥まったところにある隠れた二カ所に、そしておのおのに学院の三分の一以上が収容されうる家屋が設立された。」
 「そのほかに、現今では下においてもっとも大きくて立派なものとなった美しい教会があったから、この教会と(修道院の)建物をどうするかという別の問題と苦悩がその後続いた。・・・殿の兄弟たちは、母のドナ・ガラシアや義姉のドナ・ジョアナとともに皆が修道院(の建物)に住むことを決心したのであり、教会が(ふつうの)家に見えるように教会に仕切りを施し、学院の距たったところに留まった司祭たちがミサを捧げ得よう、香部屋と礼拝堂は残しておくことにした」⁽¹⁵⁾

こうした事情は、三ヶ月と経たないうちに好転し、修道院であった建物を明けたので、司祭や修道士たち全員はふたたび学院に合流することができた。

信福寺辺りに教会があり、教会と学院とは学院の司祭たちが安心して「ミサを捧げ得る」くらいの近距離圏にあったといえるだろう。旧河内浦中学校の川土手説は、両方の間に一町田川があるので簡単に往復できたとはいえない。また下田古城説は、城址や周辺の山城を含めて隠れ地とした説だが、山間地に900坪もの平地を想定するのは無理が多い。それに山城に集中すれば、かえって逃げ場を失い、多人数が一網打尽となる危険があっただろう。

4. キリシタン集落

1589年2月24日付、コエリュ書簡(1588年度・日本年報)に、次のように河内浦集落のロケーションが述

べられている。

「河内浦の城下には修練院がある。その周辺の諸村落で四百人以上の人々が亡くなった」⁽¹⁶⁾

ここには、疱瘡流行時における城、修練院、村落の関係が描かれている。この記述から、修練院の所在は城内でなく、城下に展開したこと。さらに城、修練院、周辺村落は交わることなく構成されていたと読み取れる。

また先に引用したように、「(一カ所に)集合していることは許されないことと思われるから、ともかく学院を解体するように」とあるので、当時、学院の建物は一カ所に集中し目立った大建築だったとみられる。

この学院と修練院は、相互に関連して使われていた。天正遣欧使節の四人(伊藤マンショ・千々石ミゲル・原マルチノ・中浦ジュリアン)は、日本帰国後の1591年に河内浦にきて、最初の二年間は修練院で祈りと修業につとめ、次にイエズス会員に入会してコレジョに移り、数年間にわたってラテン語、日本文学、哲学および神学の勉強に打ち込んだ。ここで、前にあげた建物群についての記述を取り出してみる。

「このコレジョの副院長として務めています。修練院がコレジョの隣です」(1592年10月2日付、メスキタ書簡)⁽¹⁷⁾

「またそれ以上に主な成果はヨーロッパの学校に似た様式で、このコレジョが創立されたことです」(日本1594年3月6日、伊東マンショ書簡)⁽¹⁸⁾

「学院の中の離れた場所で、ラテン語と日本語のための印刷所が設けられている」(1596年12月13日付、ルイス・フロイス書簡・1596年度日本年報)⁽¹⁹⁾

「それ以外に修練院がコレジョの中に付設されていますので、二十四人の修練者もいます。この修練者の中五人は三期生で、既に勉強を終了しています」(1595年、メキスタ書簡)⁽²⁰⁾

「教会が(ふつうの)家に見えるように教会に仕切りを施し、学院の距たったところに留まった司祭たちがミサを捧げ得よう、香部屋と礼拝堂は残しておくことにした」⁽²¹⁾

これらのことから、秀吉の迫害で天草島に移転した学

院と修練院の特徴は以下の5点にまとめられる。

- 1 学院の中に修練院が付設され、学院と修練院の建物は隣り合わせにあった。
- 2 学院の中の離れた場所に印刷所があった。
- 3 学院はヨーロッパの学校に似た様式で創立された。
- 4 修院内の教会と学院とは、学院に留まった司祭たちが（見つからずに）ミサを捧げ得るぐらいの距たったところにあった。
- 5 4を考慮し、修練院は低年齢施設であるので、修練院は学院より修院に近い側に位置したであろう。

以上のことから河内浦のキリシタン集落形成における施設配置について次のように推定した。

河内浦では、周辺村落からやや離れたところに大規模に施設構成されていた。キリシタン集落は、下田城下のすぐ近くの寺院地辺りを司祭館さらに修院の拠点とし、続いて秀吉の迫害で学院、修練院が移転して集まり拡大した。修院は修道院と教会からなり、修院の位置は小高い信福寺辺りであっただろう。移転してきた学院等の位置は、現在の信福寺前に広がる「馬場」の地名が残る広大な平坦地の一部が想定される。修院に隣接して、南西側に修練院、さらに隣接して学院の順に建物が配置したと考えられる。

その後、1597年の二十六聖人の殉教に続く迫害のため、河内浦の学院と修練院は長崎に移った。建物はそのまま残されていたが、1604年に天草の教会は志岐と上津浦を除いて完全に破壊され、河内浦のキリシタン施設はこの時になくなったとみられる。

謝辞

本研究はJSPS科研費26420633の助成を受けたものです。また資料収集にあたり、長崎歴史文化博物館、天草キリシタン館、天草市役所、天草市世界遺産推進室、天草市立河浦図書館、長崎総合科学大学附属図書館の方々にお世話になりました。この場を借りて感謝申し上げます。

脚注

- (1) 結城了悟『天草のコレジヨの位置』1988、鶴田文

史『河浦郷土史』第七輯1995、玉木謙『天草学林・東向寺説』の欺瞞を暴く2001

- (2) 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第3巻 p.363
- (3) 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史9』p.309
- (4) 脚注(2)に同じ p.363
- (5) 『肥後国絵図』永青文庫所蔵
- (6) 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第5巻 p.140
- (7) 松田毅一監訳、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第6巻 p.18
- (8) 松田毅一・佐久間正編訳『日本巡察記ヴァリニャーノ』第四章 p.207
- (9) 今村義孝『天草学林とその時代』p.61
- (10) 脚注(6)に同じ p.86
- (11) 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史12』p.89
- (12) 1593～94年日本年報 p.73
- (13) 脚注(11)に同じ p.90
- (14) 脚注(11)に同じ p.240
- (15) 脚注(11)に同じ p.241
- (16) 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅰ期第1巻 p.42
- (17) 結城了悟『天正少年使節—史料と研究—』1993年、純心女子短期大学長崎地方文化史研究所 p.144
- (18) 脚注(17)に同じ p.136
- (19) 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅰ期第2巻 p.153
- (20) 脚注(17)に同じ pp.150-151
- (21) 脚注(2)に同じ p.241

参考文献

- (1) 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』1998
- (2) 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』1979
- (3) 今村義孝『天草学林とその時代』1990
- (4) 結城了悟『天正少年使節—史料と研究—』純心女子短期大学長崎地方文化史研究所 1993